

## 上郡町の偉人

## 大鳥圭介

「鵬程万里」第二十四回 著者 中川由香

十九世紀頃、骨相学という疑似科学が流行しました。精神は大脳皮質の一領域に存在すると考え、頭蓋骨の輪郭から人の性格や心的特性が分かるとする説です。オーストリアのガルが提唱しました。外から見える頭の形から、精神という見えないものが分かるということで、一期は大衆人気を博しました。日本でも、明治末期に性相学会という骨相学の学会が結成されました。

その学会誌「性相」に、骨相学からみた圭介の性質が論述されました。分析には男爵大鳥圭介の晩年の写真が用いられています。

「男爵の顔面の両眼の位置から、脳頂と下あごへの距離を比較する。両眼から頭頂へは短くないのが、男爵の非凡な所だ。両眼から頭頂の間に、いかに多量の脳髓が満ちているかが分かる。髪際の頭頂部には、鑑識性、仁恵性、尊崇性、強硬性、調和、諧謔、靈妙、正義、宏大などが現れている。これらが、男爵が非凡な活動を為した元だと観察される」と記されています。圭介は、調和を重んじ、ユーモアを愛し、広い心を持ち、時に譲れない点では頑固であることでも知られていました。続けて「圭介が平民出身から名声を内外に轟かし、至高の枢密院顧問官まで昇り、家は華族に叙されて男爵となったことは、その面相から偶然ではない」と著者は述べます。

そして「顔の配置と輪郭を観察すれば、精緻さは不足する観もあるが、雄大偉麗と確かに認められる。耳の上の直径の長さは、勇敢にして沈毅、機略があり、いかなる危急に遭遇しても、その恨みは表さない。男爵は、前述の強硬性などと共に、百難千艱、崎嶇の嶮路を泰然自若として切り抜けた。従容不迫、平然談笑の間に、死生の関門を通過し、ついに天朝の余沢を受けたゆえんである。いわゆる、大勇を持つ明哲といふべき」と続きます。

これは、戊辰戦争当時の新聞や官報で見られる圭介の姿でした。「百難千艱」「崎嶇」は圭介の戦中記録である「南柯紀行」に表れる表現です。「泰然自若、平然談笑」は、当時圭介と共に戦った者の当時の伝習隊や会津の兵の談話で語られました。更に圭介が降伏した後、内乱の罪は許され、死刑を免じられ、死生の境をくぐり抜け、その後を生きる事になりました。著者はそうした事実を参照したと思われる。

「顔の下部、特に口唇と両目の形は、愛情、社交的作用の満足の発達を表している。警戒性は割合少ないようにみえる。また構造性は発達しているが、精緻の思想は欠けている。我流が凝っていて心内奥深い所に蟠っているのが、この人が公爵侯爵にも優る大器を持っているのに、男爵位に留まっていたゆえんか」

社交的で警戒性は少ないという指摘は、圭介

がお雇い教師などの外国人と親しく付き合ったことからでしょうか。「精緻に欠ける」というのは、圭介は新規の技術を次々に紹介し導入した一方、一つの事を極める為の研究者にはならなかった点を指すのかもしれない。我流が凝るといふのは、書画や漢詩など趣味の多彩さもあるでしょうが、自己を敗軍の將と位置付け、政治家として一国の頂点などは目指さなかった圭介なりのあり方も関係すると想像されます。

「乱世の英雄で、治世の能臣。一朝風雲急を告げ、国命を賭ける一国の大事に際しては、かけがえない良き大使臣である。旋天動地、治乱の鍵を握り、一国の運命を左右する活機を制するには、この従容不迫、無邪気で、楽天的な顔面の人でなくてはならない。実に英雄、君子、偉人である」

この文章は、圭介の清国・朝鮮大使時代を彷彿とさせます。日清戦争前の大局を舵取りした手腕についての世間の称賛を、具現していると思われまます。

記事は、圭介が故人となつて間もない、明治四十四年の文章でした。圭介の人生の諸事件や行動の結果を、骨相にこじつけた感もあります。骨相学の科学的根拠は、現在すでに否定されています。しかしこうした論説が堂々で行われていた所に「乱世の英雄、治世の能臣、苦難と嶮路を泰然自若で切り抜け、穏やかで何事にも動じない、君子、偉人」という、当時の世相における圭介像が見て取れます。

崎嶇…険しいこと、辛苦

従容不迫…どんな時も穏やかで落ち着いていること